

第15回大会 盛会のうちに終了!

キリスト教礼拝音楽学会第15回大会に参加して

安積 道也

学会当日 2015 年 5 月 30 日(土)の仙台は、天候に恵まれ、会場の東北学院大学土樋キャンパスまでの道のりは快適なものであった。今回は、佐々木一家が会場設置から当日運営に至るまで手筈を整えてくださった。また、遠来の学会員に加え地元仙台からの参加者も多く、活気にあふれた一日となった。

研究発表

佐々木 悠

金澤会長による挨拶が終わると、エリザベト音楽大学講師である佐々木悠氏が、「1945 年以前の教会音楽教育における教科書—カトリック系の初期の書籍を中心に—」という題で研究発表を行った。これは、2013 年国際基督教大学で行われた第 13 回大会での氏の発表に続くものである。

佐々木氏の研究対象は、ドイツ歴代の教会音楽教育に使用された教科書と、教会音楽関連の情報誌であり、それらの文献をもとに、19 世紀末から現在に至るドイツの教会音楽教育史を明らかにしていくものである。両世界大戦を挟むためか、ドイツ国内でもまだ研究が進んでいない分野である。

ドイツでは、オルガニストを含む礼拝音楽奉仕者は公務員に近い職務・給与体系を持っている。佐々木氏は、職業的教会音楽家を支える教会音楽教育機関のカリキュラム(オルガン演奏、指揮法、神学、讃美歌・聖歌学、典礼、他)の現状を紹介したのち、歴史的に使用されてきた教会音楽科の教科書を紹介しながら、カリキュラムの変遷を概観した。

この発表によると、最初期の教科書と思われるカトリック系教科書『カトリック教会音楽ハンドブック』(1909)の内容が、既に教会音楽家養成のために、非常に包括的かつバランスのとれたものとなっており、これらの構成と内容は現在の教科書と基本的に変わらないという。チュービンゲンの司祭である O. ガウスと、ドイツロマン主義の代表的な神学者である J.A. メイラーによる 586 頁

に及ぶこの大著は、大きく 3 つの大項目からなっている。その構成は、1. 歴史と美学、2. 理論と実践(音楽、声楽、生態学、グレゴリオ聖歌)、3. オルガンの構造とグロッケン、からなっており、自分たちの教会音楽を支えるために必要な項目のみならず、教育機関のあり方にまで、記述は及ぶ。

しかしながら、このカリキュラムも時代の流れには逆らえなかった。1929 年以降の音楽教育雑誌にある教会音楽養成に関する記述を追っていくと、次第に「歌の指導者」養成が強調されていく傾向が顕著に現れる。これは、敗戦によって失われたドイツ人アイデンティティーの再獲得に「コラール」が用いられたのではないかと佐々木氏は推察する。ナチズム台頭とナショナリズムの渦に教会が加担していく歴史の中で、いかに教会音楽が位置づけられていくかについては、今後の佐々木氏の論考を待ちたい。

実際に教会音楽科のカリキュラムを修了した筆者は、佐々木氏の発表を自分のルーツを問うものとして目のさめる思いで拝聴した。個人的に感銘を受けたことは、前述の教会音楽ハンドブックを著した J.A. メイラーが、「改めて音楽の内的な本質は一体何であるかを考えることが、未来のカトリック教会音楽を考える上で非常に基本となる」(訳: 佐々木氏)ことを確信し、「美学」に重点を置いたことである。最近のドイツの教会音楽科カリキュラムでは、若者離れが深刻化したドイツ諸教会からの要請により、ビッグバンドやポップスの指揮・指導法が必修化されつつある。私は、それらが礼拝音楽に適していない、などと言うつもりは毛頭ない。しかし、メイラーの言う「美学」を問うことなしに若者獲得のツールとしてしか教会音楽を考えなくなった時、礼拝音楽は本来の機能を失ってしまわないのかと自問する。今こそ「音楽の内的な本質」について、問い直すべきではないだろうか。

講演

佐々木しのぶ

続いて、会計として長年にわたり当学会をお支えいただいている佐々木しのぶ氏による、論文の発表があった。氏からは、「キリスト教音楽活動の社会的貢献の試み」と題し、地元仙台で、1992年に設立し、23年間にわたって継続したキルヒェン・ムジーク・アカデミー（以下KMA）について、ご講演いただいた。KMAは「NHKドキュメント：チャウシェスクの子供たち」(1991)に衝撃を受けた佐々木氏が、子供たちを支援するイギリスの看護団体「ヘルス・エイドJK」に寄付金を送るために立ち上げた音楽団体である。ご自身のドイツ留学時に参加したヘルムート・リリングによるシュトゥットガルト記念教会「カンタータ礼拝」から受けた感動を、仙台でも再現できないか、という願いも重なっているという。設立当初は、チャリティーコンサート自体が地元で理解を得られず、名義後援さえ受けられなかったことや、資金ゼロ、演奏者の手弁当参加で始めた初期の話は、私の胸を打った。1999年第8回公演から、それまでの器楽団体に合唱団を加えた。現在に至るまでKMA合唱団の方針として、団費は取らず、チケット販売協力を要請はするものの、ノルマは課さない。また合唱団には練習出欠も取らない、という驚きのものであった。四半世紀にわたって合計900万円ほどの寄付金を納め、今年その活動に終止符を打った全公演記録と詳細は学会誌14号(2014)を参照されたい。同じく合唱団を率いる私にとっては、とりわけこの合唱団の運営方針とその寄付金の豊かさは、驚嘆に値するものであり、ただただ、敬服するのみである。

礼拝堂見学

午後は、東北学院正門右手にあるラーハウザー記念礼拝堂で、礼拝堂とそこに設置されているベックラート社のパイプオルガン(1978年製作、ネオ・バロック様式)の紹介があった。キリストの昇天場面が描かれた正面のステンドグラスが美しく、石作りで900人収容可能な礼拝堂の響きはヨーロッパのそれを思わせるものであった。佐々木悠氏はレスピーギの『天使ミカエル』(『教会のステンドグラス』より)をパイプオルガンで演奏し、礼拝堂とオルガンの響きを紹介してくれた。そして、先日最終公演を終えたKMA有志の皆さんによる合唱演奏がオルガンの伴奏に乗せて行われた。演目は常任指揮者佐々木しのぶ氏指揮の下、シューマンの『レクイエム』より「イントロイトゥス」であった。今日はじめてこの礼拝堂で歌ったとは思えぬほど声がよく響き、これまで積み重ねてきた合唱団としての実力が十分に発揮された演奏であったと

思う。このためにお集まりいただいた合唱団有志の皆様、心からの感謝を申し上げたい。

シンポジウム

休憩を挟んだ後、3人のパネリストによるシンポジウムが行われた。まず仙石病院内科部長、KMA理事である神部真理子氏から「音楽とボランティア活動」というタイトルで、発表があった。神部氏は「音楽は災害時に力を持つのかどうか」という演奏家にとって常に自問し続けなければならない問いについて、一被災者の立場から、様々な引用を用いて持論を展開された。まず公益財団法人「音楽の力による復興センター東北」主催の300回を越えるプロの演奏家による復興支援コンサートを紹介し、良質な音楽が確かに被災者の心に訴える力があることを認めた。しかし、メディアを介した報道上の表現に、氏は疑問を呈する。被災地にいる人間に「寄り添う」、「元気を与える」、「復興に与える希望」といった耳に心地よい言葉は、現場の被災者の心情のみならず、演奏する者の活動根拠ともかけ離れていることを、幾つかの記事を紹介することで示した後、演奏を通じた復興支援の難しさについて言及した。そして「音楽は今何ができるのか」という問いに対し、神部氏は「災害時に音楽が力を持つとすれば、『災害の犠牲になられた方々の鎮魂歌』としてではないか」と端的に結論付けた。他の世界に生きる人たちとの架け橋としての音楽を共有することで、それを聞く人々の心に力をあたえるのではないか、という推察は、現場を生きる方の重みのある言葉で語られた。

次に、話題が変わり、仙台白百合学園中学校教頭、KMA理事である土倉^{おさむ}相氏が、足掛け24年もの長きにわたってKMAが活動を維持しえた、その謎に迫った。氏は、フルート奏者として第1回目からKMAの全演奏会に出演した唯一の方である。

土倉氏は、KMAが継続した理由をいくつか挙げた。それは、団の方針(チャリティーコンサート)を最後まで堅持したこと、運営経営面で事務的な諸作業を佐々木一家が献身的に行ったこと、演奏家に参加費など金銭的負担をかけなかったこと、演奏レベルの向上にこだわったこと、などであった。氏はアマチュア音楽家として、すばらしいメンバーと共に、数多くの大曲上演に参加できたことを感謝して、発表を終えた。

最後に仙台南伝道所牧師^{ひらか}平賀真理子氏から、牧会における音楽の力について、発表があった。氏は、中高ミッションスクールでの教育現場を経ており、卒業生たちの脳裏には説教よりも賛美歌がより強く残っている事実を挙げ

た。事例として、80歳を過ぎた高齢者が教会の門を叩いた理由が、学生時代の記憶に残った賛美歌であったというエピソードを紹介した。そして聖書のみ言葉を引用しながら、音楽の力は神の霊であり、聴くものが音楽によって力を受けて癒され、そして自立していくことを語った。

質疑応答

発表の後、伊東辰彦氏の司会の下、震災と音楽(歌、賛美歌)について活発な議論が交わされた。中でも東日本大震災時、余震に備え机の下に隠れていた生徒たちが、誰ともなく賛美歌を歌いだし、それが他のクラスに伝播していったという土倉氏の発言を皮切りに、震災などの「非日常時」に、それを乗り越えるために声を合わせて歌を歌ったという多数の事例が、感動を持って報告された。発表者の平賀氏はご自身の経験を総括し、「被災者は、最終的には自分の力で立ち上がらなければならない。そして、非日常(被災)を乗り越える力は、それまでの日常の積み重ねによって蓄えられたものがその源である。非日常を

乗り越えるために、如何に日常でその力を蓄えているのか、ということが問われる」とまとめると、植木紀夫氏はそれに答え、賛美歌の力が発揮される条件として、「社会(もしくはグループ)が作品を多数共有する必要がある」ことを強調した。氏はさらに、賛美歌に限らず、人間の存在や人間観に関わるような深い内実を有した作品が今から多く生み出される必要があることを訴えた。

大学の礼拝で奏楽に携わっている筆者にとって、この議論は、教育現場における賛美歌奏楽の一側面に、新たな光りを照らすものとして有意義なものであった。

最後に今回の総会で会長職を退任することとなった金澤正剛先生が、ユーモアあふれる温かい言葉をもって閉会の挨拶をなさった。8年にわたり、当学会を導いてくださった金澤先生への心からの感謝を込めた大きな拍手を以って大会は幕を閉じた。

(当学会理事 西南学院音楽主事)



- ①開会挨拶
- ②研究発表 佐々木悠氏
- ③講演 佐々木しのぶ氏
- ④礼拝堂へ向かう一行
- ⑤礼拝堂見学
- ⑥KMA合唱
- ⑦安積氏オルガン試奏

- ⑧シンポジウム
- ⑨神部眞理子氏
- ⑩土倉 相氏
- ⑪平賀眞理子氏
- ⑫質疑応答 植木氏
- ⑬伊東辰彦氏
- ⑭質疑応答

★テーマ キリスト教音楽活動の社会的貢献

★日時 2015年5月30日(日) 10:00-16:30

★会場 東北学院大学土樋キャンパス8号館1,2会議室

★プログラム

9:30 -	受付	総合司会	伊東辰彦
10:00 - 10:05	会長挨拶	会長	金澤正剛
10:05 - 10:30	研究発表・質疑応答 「1945年以前の教会音楽教育における教科書」		佐々木悠
10:30 - 10:45	休憩		
10:45 - 11:45	講演 「キリスト教音楽活動の社会的貢献の試み」		佐々木しのぶ(当学会理事)
11:45 - 13:00	昼食会、自由行動		
13:00 - 13:30	総会		
13:30 - 14:30	礼拝堂見学		
14:30 - 14:45	休憩		
14:45 - 16:30	シンポジウム パネリスト 神部真理子氏(仙石病院内科部長、仙台ゾンタクлуб会長、KMA理事) 土倉 相氏(仙台白百合学園教頭、KMA理事) 平賀真理子氏(仙台南伝道牧師、オルガニスト)	司会	伊東辰彦
16:30	会長閉会挨拶		金澤正剛

GCoMM (Global Consultation on Music and Mission)参加報告

手代木 俊一

今年の7月6日から9日までタイのチェンマイで開催された、GCoMM (Global Consultation on Music and Mission)と翌10日のICE (International Council of Ethnodoxology)主催のpost-conference meetingについてご報告いたします。GCoMMは福音派系宣教団体・音楽団体を中心とした国際会議で、GCoMMの主催団体の役員や各分科会の議長の多くはICEのメンバーでもありました。参加者名簿が配布されなかったので参加者の全体像は把握できませんが、宣教師をはじめとする聖職者、音楽家、民族音楽学者が中心だったように思います。

この国際会議については学会員の井上義氏より昨年5月にうかがっており、井上氏も参加するとのことなので、便乗させていただくことにいたしました。

この大会のキーワードは、“Ethnodoxology”ということで、この言葉は辞書にも載っておらず、あまり聞き慣れない言葉でした。直訳すれば、民族頌栄(讚美歌)学ですが、何か違和感があります。この“Ethnodoxology”という言葉の提唱者ディヴィッド・ホールは1997年、次のように定義しています。

私は、エスノドクソロジーとは「まったく異なった文化のもとで、神への礼拝とはどうあるべきか考える学問」、またはより正確に言うと「偽りのない真の神を、まったく異なった文化で育った人々が、聖書の中に啓示されている様に、いかに讚美するのか、またなぜ讚美しなければいけないのか」という事を、神学的、実践的に考える学問」である。(『Worship from the Nations: A Survey and Preliminary Analysis of the Ethnodoxology Movement』『Artistic Theologian』Vol. 3, 2015, p.3)。この資料はネットで閲覧することができ、無料でダウンロードすることができます。

大会の案内書にはまず、次のように「背景と目的」、「参加者への利点」が書かれていました。

〈背景と目的〉

GCoMMの目的は、神が音楽及び関連する芸術領域を通して民を御自身にいかにして引き寄せていくかを探求することにある。GCoMMは過去3回催されている。2回はアメリカで、1回はシンガポールである。今回第4回目のGCoMMは、タイ、チェンマイで開催される。直近の登録状況では、南極大陸を除く地球上のすべての大陸の、36カ国から代表者(200人以上?)を迎えている。この会合において、タイと世界の人々が芸術と聖職者の職務についての意見を交換することで、両者にとって大いに利することになるであろう。タイの人々にとってこの会合は、自身の世界の見方を広げることに役立ち、そしてその一方で世界の人々も、タイのキリスト教徒のもの考え方や思想を自国に持ち帰ることができるであろう。

〈参加者への利点〉

GCoMMは以下の事で、参加者に恩恵をもたらす。

- クリスチャンの人生における「神への心からの音楽と諸芸術」の役割と機能について会話する。
- 個人的な友情を育み、協力関係を形成する。
- 他の人が様々な状況の中で便利だと見出した手段、方策、モデルについて議論する。
- 最近の挑戦と好機について確認する。
- これから先のコミュニケーションとネットワーク(例:ジャーナル、データベース、ウェブサイト)を支援する。

GCoMMに派遣された者は以下の事が可能になる。

- *世界中の音楽制作者、様々な芸術領域のクリエイター、キリスト教指導者と触れ合うことができる。

- * 文化的に関連づけられる音楽や諸芸術をどのように用いるかを学ぶことができる。それは他の人が福音に導かれ、それによって勇気づけられるからである。
- * 地理的に類似していたり、またまったく異なったりする地域から来た、同じ目的を持った人々が、知識、経験を分かち合うことができる。
- * 多くの民族による讃美を通して、神の多面的な英知を褒め称えることができる。

この「背景と目的」、「参加者への利点」を読んで何となく固い国際会議なのではないかと思っておりましたが、実際に参加して驚いたことは、あまりにも音楽に満ち、楽しい会だったということでした。子供連れの参加者もあり、中には生後まもない赤ちゃんを抱いてきた女性もありました。国際会議というより、どこか開放的で、親しみやすさとくつろげる雰囲気を感じました。「背景と目的」にも書かれているように開催国タイへのリスペクトも強く感じ、かつてのオリエンタリズムのような感覚はこの大会ではまったく感じられませんでした。そのことを以下書いていきたいと思えます。

初日は夕方からで全員参加のセッションと礼拝、2日目からの3日間は朝晩に礼拝(1時間)、午前中と夜に全員参加のセッション、各分科会が2つ、自由に発表していい時間(Open Mic Gift Presentation, Tea Time Talk)がありました。そして毎日2回の礼拝でこの会のテーマ曲である讃美歌《Every Music, Heart, and Voice Rejoice》が歌われました。伴奏はタイの民族楽器でタイ在住の女性宣教師(アメリカ人?)が毎日指導にあたりました。この女性が先ほどご紹介した赤ちゃんを抱いた宣教師でした。

全員参加のセッションでは2人の牧師(エジプト人と中国人[香港在住])が2回ずつ主題講演を英語で行い、それは詩篇67を基調としたものでした。2人はともに英語圏で神学を学び、講演はオバマ大統領の話聞くようで、間の取り方、強調の仕方、表情とプレゼンテーションの訓練を相当積んでいるようでした。

礼拝では様々な国、地域のキリスト教礼拝音楽が用いられ、様々な楽器が使用されました。地域性、民族性の強い音楽の紹介もあれば、会場に参加した人が一体となって讃美歌を歌うこともありました。

各分科会は9つの分科会に分かれ、わたしは「Planning and Leading Biblical Worship Services」に参加いたしました。この分科会にもエレキピアノが持ち込まれておりました。タイトルからは想像もできないと思えます。民族音楽と礼拝音楽を追究する分科会もあったと聞きました。

Open Mic Gift Presentation, Tea Time Talk では様々な地域に根差した音楽を聴くことができ、踊りや寸劇も

ありました。一緒に踊り、歌いました。歌では英語のテロップもあり、歌詞の内容も知ることができました。それにしても地球にはこんなにも多くの言語があるのだということを知らされました。日本の東日本大震災に関して、映像による発表も2つありました。1つは被災地でのオルガン演奏会の話でした。

Post-conference meeting では、さらに少人数(6人程度)に分かれそれぞれの国、地域の現状とその対策を話し合いました。わたしは、日本の讃美歌は西洋音楽で歌われ、86調の西洋音楽に75調の日本語歌詞をどう適合させていったか等、「日本における讃美歌」を歴史的に話しました。そして最後に集合写真を撮りました。

わたしは讃美歌の歴史に関わっていますが、19世紀の宣教師には未開の土地(アジア等)に文明のキリスト教を伝えるという意識が強く、欧米の音楽も優れた音楽として位置付けていたと思います。しかしこの大会ではその様な発想はまったくないと思えました。冒頭のデビッド・ホルの言葉、「『まったく異なった文化のもとで、神への礼拝とはどうあるべきか考える学問』、またはより正確に言うと、『偽りのない真の神を、まったく異なった文化で育った人々が、聖書の中に啓示されている様に、いかに讃美するのか。またなぜ讃美しなければいけないのかという事を、神学的、実践的に考える学問』」を、そしてこの会の目的、「神が音楽及び関連する芸術領域を通して民を御自身にいかにして引き寄せていくかを探求すること」を実践している大会のように思いました。大義と実際を結びつけたこの国際会議関係者は大変な準備と検討をかさねたのだと思えました。

この大会に参加した日本人は3名(日本から)、日本宣教すなわち日本滞在経験のあるアメリカ人3名、ミャンマーとパキスタンで伝道している日本人女性宣教師が各1名で、日本に関連した人は計8名でした。8人で日本語での歓談のときを持ちました。ミャンマーは軍事政権、パキスタンはイスラム圏で最近テロがありました。お二人の、「日本に生まれ、育ったことは幸いだった」との言葉が印象的でした。

最後に全体写真を撮りましたが、「本国にこの写真が送られると困る人は入らないで下さい」とカメラマンが言うと、何人もの人が集合の輪に入りませんでした。キリスト教徒であることを偽って参加したか、恐らく宣教師としてはその国に入国していない人たちだったのでしょう。これが参加者名簿が配布されなかった理由なのかも知れません。名札にも国籍が書かれていませんでした。日本人女性宣教師の言葉が再度響きました。

次回も2、3年後、アフリカかどこかで開催するというので、まだ具体的には決まっていなかったようでした。

「雑考《たんたんたぬきの》と讃美歌」補遺

手代木俊一

前号『ニュースレター』「雑考《たんたんたぬきの》と讃美歌」で書き落としたことがありましたので、補遺として掲載いたします。

『進行曲 粹』、瓜生繁の『進行曲』の譜を元に替歌が発生したという説は、9年前の『礼拝音楽研究』第5号(2006年3月)掲載「リードオルガン教即本に見る讃美歌の影響」で赤井励理事が発表した説でした。

★2014年度総会報告

- 第1号議案 2014年度事業報告および2014年度収支決算の件
- 第2号議案 2015年度事業計画および2015年度収支予算案の件

※第1号、第2号議案、ともに全会一致で、承認された。
※役員選挙の開票結果が報告され、役員会で審議された次の役割分担案が、承認された。

赤井勲14票、安積道也11票、新垣壬敏12票、
伊東辰彦17票、植木紀夫14票、佐々木しのぶ21票、
佐々木悠12票、手代木俊一22票
(敬称略、投票数28、有効投票数27)

※理事 赤井勲、安積道也、新垣壬敏、伊東辰彦、植木紀夫、佐々木しのぶ、佐々木悠、手代木俊一(8名再選。金澤正剛前会長からは助言をいただく。)

※会長：伊東辰彦 副会長・事務局長：手代木俊一
会計：佐々木しのぶ 編集委員：伊東辰彦(委員長)、
佐々木しのぶ、手代木俊一

★役員会報告

- ①日 時：2015年3月15日(日) 14:00-16:00
場 所：かなで(池袋芸術劇場2F)
出席者：金澤、手代木
議 題：・第15回大会について
・学会誌
- ②日 時：2015年5月23日(日) 14:00-15:30
場 所：かなで(池袋：東京芸術劇場2F)
出席者：新垣、伊東、金澤、佐々木、手代木
議 題：・第15回大会について
- ③日 時：2015年5月29日(金) 18:30-20:30
場 所：仙台トラストタワー 2F「万葉」
出席者：安積、伊東、金澤、佐々木しのぶ、佐々木悠、
手代木
議 題：・第15回大会について
- ④日 時：2015年7月26日(日) 14:00-15:30
場 所：かなで(池袋芸術劇場2F)
出席者：新垣、伊東、金澤、佐々木、手代木
議 題：・ニューズレター秋号、学会誌第15号について
・第16回大会について、規約について
- ⑤日 時：2015年10月12日(月・祝) 14:00-15:30
場 所：かなで(池袋芸術劇場2F)
出席者：赤井、伊東(会長)、手代木(書記)
議 題：・第16回大会について

★学会誌発行予定

第15号 学会誌……2016年4月半ば刊行予定
内容・巻頭言……伊東辰彦
・論文……新垣壬敏

「山田耕筰とキリスト教」
仲座巖手・代木俊一
「琉球語讃美歌史(2)」
佐々木悠
「1945年以前の教会音楽教育における教科書」
鈴木 治「未定」
・研究ノート 手代木俊一
「鳥居忠五郎と讃美歌」
・第15回大会プログラム・報告……伊東辰彦

★第16回大会予定

日時：2016年5月28日(土) 10:00-16:30
会場：立教大学
午前：チャペル会館2F マグノリアルーム

★会員出版物の案内・募集

※編集委員会より
会員の新聞刊物を掲載し、皆様にご紹介したいと思えます。編集委員(手代木、佐々木宛)までお知らせください。

★会費納入のお願い

会の運営に対して、いつも支援をいただき感謝申し上げます。2015年度の会費をまだ納入されていない方は、ぜひ、下記の口座にお振込みくださいますようお願い申し上げます。

キリスト教礼拝音楽学会
郵便振替口座 02240-3-46335

入会金：3,000円(入会時のみ)
年会費：正会員 6,000円
準会員 3,000円
賛助会員 20,000円

- 住所変更等も、ぜひお知らせください。
- 郵貯銀行の口座をお持ちの方は、この振り替え口座に振替用紙を用いずに、無料で送金ができますので、ご利用ください。
- 会費納入についてご不明なことがございましたら、下記にご連絡をお願い申し上げます。

会計担当 佐々木しのぶ
〒980-0023 仙台市青葉区北目町6-6-1401
TEL/FAX 022-262-6565
Email:sshinobuorg@ybb.ne.jp

